

# 工藤忠資料から見た民国初年の白狼軍（白朗軍）

山田 勝芳 \*

Bai-lang-jun (the Bandits of Bai Lang) in 1913-1914, as seen from Kudou Chuu's sources

YAMADA Katsuyoshi

## 要旨

中華民国初年、河南省を中心にして湖北・安徽・陝西・甘肅に侵攻した大反乱集団白狼軍は白朗を大首領とし、多くの首領たちと活動していた。これは地方の盗賊化した專業武力集団＝土匪の巨大化したものととらえられる。これに関しては、内部からの情報がなく、周囲からの情報、あるいは後年の聞き取り情報で、農民起義、義兵、農民反乱などの性格規定がなされた歴史があったが、この白狼軍内部に入り、さらに孫文・黄興に直接白狼軍との連携を訴えた工藤忠の資料を史料化し、研究を進展させたものが本研究である。白狼軍と孫文・黄興との関係は希薄なことや、その根拠地問題や詳細な白狼軍の実態などを明らかにし、白狼軍から約 100 年の今、白狼軍研究の重要な礎になりうるものとした。

キーワード：工藤忠、白狼軍、白朗、革命派、第二革命

Keywords : Kudou Chuu, Bai-lang-jun, Bai Lang, revolutionists, The Second Revolution

## 目次

1. はじめに
  2. 白狼軍関係史料と学説史的検討
  3. 工藤忠の白狼軍関係資料について
  4. 工藤忠の白狼軍関係資料の検討
    - 4.1. 「手記」の白狼軍関係記事とその検討
      - 4.1.1. 第二革命の南京から漢口へ
      - 4.1.2. 白狼軍へ入り、革命派 2 人に会う
      - 4.1.3. 白狼軍の日常と根拠地霸王山
      - 4.1.4. 霸王山を出て、葉県で捕えられるも目的地周家口に着く
      - 4.1.5. 漢口から上海、そして日本で孫文・黄興に会う
    - 4.2. 「漢口日本駐屯軍に提出せる報告書」の検討
  5. 結論
- [資料「漢口日本駐屯軍に提出せる報告書」(節略)]

---

\*東北大学名誉教授

## 1. はじめに

白狼軍とは、民国初年に河南省を中心に活動した巨大反乱集団、いわゆる土匪集団であり、その活動範囲は湖北省・安徽省・陝西省・甘粛省に及んだ。その首領は、河南省宝豊県（現平頂山市宝豊県）の大営に近い大劉村出身の白朗（1873-1914）である。この白朗集団がもたらした広範かつ深刻な被害が、白朗とその集団を白狼・白狼軍と呼ばせた。これは辛亥革命後、大總統袁世凱が基盤を固めつつあったとき、北部中国の腹部といってよい地域での土匪集団による被害だったため、その政権に大きな打撃を与えた。

しかも民国2（1913）年3月、中華民国最初の議会選挙で国民党（理事長孫文、代理理事長宋教仁）を勝利に導いた党の実質的指導者宋教仁の暗殺事件が発生すると、反袁世凱の第二革命の気運が盛り上がり、7月に南京で黄興が挙兵するなど第二革命が起こっていたという政治的に極めて重大な時期だったし、白狼軍が北京と漢口を結ぶ重要鉄路の京漢線沿線地域で活動していたため、軍事的・経済的にも袁政権にとっては警戒すべき存在だった。一方、革命派は自分たちにプラスになればと考えていたとしても不思議ではない。要するに、袁政権、革命派ともに白狼軍の存在を強く意識せざるをえなかったのである。

さらに京漢線沿線を中心として欧米各国の宣教師・教会が白狼軍の殺戮・破壊・掠奪の対象になることもあったため、各国も袁政権に討伐を要請していた。また北京・上海・漢口などの日本外務省の公館や天津の支那駐屯軍なども袁政権の基盤安定に関わるものだけに注目していたとみられるが、特に場所的にも河南に近い漢口の中支那派遣隊（注1）が実態不明のこの白狼軍に関心を注いでいた。

こうした時期に、南京の第二革命軍に参加し、南京陥落直前に脱出して漢口に行き、漢口から白狼軍に入って白狼軍と革命軍を結びつけようとした日本人がいた。それが工藤忠（1882-1965）である。工藤は20世紀前半の東北アジアの重要事件の多くに関わったり、あるいはその現場に立ったことがあるという稀有な経歴の持ち主である。この工藤忠研究の基礎とするために、まず彼の履歴の全体像を示すべく評伝としてまとめたものが拙著『溥儀の忠臣・工藤忠』である〔山田勝芳2010〕。工藤の事績については拙著を参照していただくこととして、ここでは必要な範囲内で工藤について説明する。

工藤の初名は鉄三郎で、後1932年に満洲国執政溥儀から「忠」名を与えられ、さらに1935年に戸籍上も「忠」に改名した。したがってこの1913年段階の名は鉄三郎であり、中国名「王鉄石」を名乗って白狼軍に入ったのである。工藤は白狼軍に入るにあたって、中支那派遣隊と密接に関わった。司令官の白川義則大佐が工藤が白狼軍に入ろうとしている情報をキャッチして、工藤に別人名の護照（日本公館からの要請で中国政府が発行する国内旅行用パスポート）を与え、正体不明の白狼軍について情報をもたらしよう依頼したのである。幸いにも工藤が白狼軍から生還して白川司令官に提出した「漢口日本駐屯軍に提出せる報告書」（以下「報告書」とする）と、工藤の前半生の自伝「手記」の白狼軍関係の記述が残されていた。これらは、白狼軍内に入り大首

領白朗や首領たちに会い、革命軍との連携を持ちかけて帰還し、しかも日本で孫文と黃興に会って直接白狼軍との連携を勧めた人物が残した資料であり、正に白狼軍研究の第一級の史料といつてよい。その史料性格については後述するが、中国にもこれだけの背景と内容をもったものは存在しない。

なお本研究は、工藤が残した「工藤忠関係資料」の著録と史料化、及びそれらに基づいた研究を進める中での1テーマ研究という性格をもつ。同資料中の白狼軍関係資料の著録・史料化を進め、先行研究や関連史料を検討した結果、これらが極めて重要な史料であることを確認できたので関連事項を検討して個別研究としてまとめたものである。資料全文はかなりの分量になるので、今後全文公開が可能になった段階で公表することとし、本研究では必要な範囲でできるだけ多く引用して史料の根拠を示すことにしたい。

なお本研究では白朗中心の土匪集団を「白狼軍」という名称で叙述する。「白狼」名称が外部からつけられたものだったとしても、他に抜きんてた殺傷力、破壊力、敏捷性、残忍性を示す「白狼」という象徴性の強い名称は、当時の社会において支配層・富者には畏怖の念と、民衆には畏敬の念を強く引き起こした符号でもあったと考えられ、また実態的にもこの「狼群」的な複合的大集団の性格をよく示していると考えられるからである。

## 2. 白狼軍関係史料と学説史的検討

白狼軍は、袁世凱政権発足期の大反乱集団として着目される存在だったため、民国初年の農民戦争の典型として、中国や日本で研究が進められた。その史料と研究については以下のように概観できる。

白狼軍の行動や内情に関する史料については、その鎮圧に躍起となっていた袁世凱政権が残した大總統の命令や各種公文など（『政府公報』に収載）や、各種新聞（注2）に掲載された情報、及び様々な形で情報を得たと思われる人間による記録等（〔杜春和（編）1980〕〔鄒永成口述、楊思義筆記1956〕等）がある。これらのうち、袁世凱政権と地方軍司令官たちとのやりとりには責任回避の言辞が弄された可能性があるが、政権側の措置や軍隊配置などがわかる。新聞は政府系、革命派系、外国系など発行主体に応じた論調の違いがあり、その違いを勘案しつつ利用しなければならない。個別記録には、軍人の立場、あるいは地方的な内容が主のものなど、記録者の立ち位置による違いが生じている。

また中華人民共和国成立以降、農民戦争史研究の高まりの中で、白狼軍は“白朗義軍”として高く評価され、当時すでに民衆の間で神話化・英雄化されてもいた白朗に関して広く聞き取り調査が行われた。特に白朗の出身地河南省で活発に行われ、開封師範学院の調査報告〔開封師範学院1960〕などの成果がある（注3）。さらに河南省宝豊県文化館で調査した史料や、安徽省・湖北省・陝西省・甘肅省に照会して提供された史料、及び開封師範学院の調査報告中の史料に基づいてまとめた王留現等の成果もある〔王留現等1979〕。調査側も情報提供側も、共産党政権の“義

軍”という評価を十分に頭に入れていたと考えられ、その情報には一定のバイアスがありうる。実際、白朗の出身地の宝豊県では、その出身地を「白朗起義紀念地」とし、地方志では「近現代人物」で白朗を列伝しているように顕彰していた〔宝豊県史志編纂委員会編 1996：104〕。ともあれ、オーラル・ヒストリー史料に内在するこのような問題点を理解した上で利用することが必要である。

このような中で、中国の白狼軍関係史料を広く収集・整理し、依拠できる史料集にしたのが杜春和編纂『白朗起義』である〔杜（編）1980〕。これは、政府と地方の档案、関係する各種史料をまとめてあり、それに加えて「個人記述」として、地方的な情報のものが5点、全体を述べているものが佚名「白狼猖獗記（節録）」と喬叙五「記白狼事」（『近代史資料』1956年3期）の2点である。喬叙五は政府軍の軍人だった人物であり、一方「白狼猖獗記」の著者は当時の新聞情報などを利用して白狼軍活動の全体を書いたとみられている。これら「個人記述」7点はいずれも節録が多いが、原文が容易に得られない状況では貴重なものであり、特に「白狼猖獗記」は白狼軍についてかなり詳細であるとの評価を杜春和も与えている。この杜春和の労作が生まれてから格段に史料状況が改善されたといえる。

この間、関係論文もかなり公表された（〔王宗虞 1964〕等）。それらにおいては、白朗の「打富濟貧」を唱えたという義兵性が強調されつつ、中国史上多々見られ、特に唐末の黄巢の大反乱に典型的な流寇性が白朗集団にも見られたというその限界性が指摘された。流寇性の果ての敗北と死亡は、中国共産党による前衛的指導がなかった集団の悲劇として結論づけられがちなのである。この視点は、日本の研究にも影響を与えた。また 1914 年の白狼軍の河南東南部・安徽省六安方面・湖北省老河口への侵攻で発生した外国人宣教師への侵害の中で殺されずに釈放された者もいるのは、この時期の革命派の外国重視の方針が参謀となっていた革命派を通じて影響した可能性がある、とした周源の研究もある〔周 1984〕。これは反袁世凱・反帝国主義の観点一辺倒では理解しきれない事象を検討した実証的な研究であるが、革命派の影響については検討の余地がある。なお、単行本でも袁世凱を論じた侯宜傑の著作〔侯 1982〕などにおいて白狼軍問題は言及されている。

また、台湾での程玉鳳（王天縦）「白朗史話」1～3 もある〔程玉鳳（王天縦）1978〕。これは程が義父王天縦の提供した資料によって書いたものである。王天縦は辛亥革命に際して河南の土匪の首領から袁世凱政権の将軍になった人物であり、河南の白狼軍討伐者の1人だった。その観点からの史料とすることができる。なお、程（王）は白狼軍の根拠地として舞陽県南部の母猪峡を挙げ、「母猪峡大本营」としている〔同 3：27〕。この点、大陸の「白朗起義調査簡記」も同様であるが〔開封師院歴史系等：白朗起義調査組 1960：21〕、この舞陽県は白狼軍の首領の1人李鴻賓の根拠地で、白朗の根拠地は別なことを工藤資料が伝えている。それについては後述する。

大陸の農民起義研究の動向を受け日本でも“中国革命における労・農運動と統一戦線”が全体的研究テーマに掲げられた。その中で坂野良吉は白朗を高く評価して、「孫文らのたたかいに比べ、はるかに深く軍閥支配にきり込んでいた。しかし、同時に、白朗起義を通じて、指導の問題

がいかに切実な問題になっているか、みてとれよう。それでは、彼らを指導しうるものは、どこに、いかにして形成されるのであろうか。この点の究明なくしては、中国革命の展望は一步もすすまないであろう」と結ぶ〔坂野 1970: 21〕。

ついで中国の史料・研究のみならず、東亜同文会の雑誌『支那』（注 4）なども博搜して白朗研究を進めたのが嶋本信子である〔嶋本 1974・1986・1990〕。これらは中国にも見られない詳細な研究であり、事実面で依拠できることも多い。このうち〔嶋本 1990〕は 1913（民国 2）年 8 月末で記述を終えており、その後嶋本は研究を公表していない。実は各種資料を見ても、1913 年 9 月から 12 月までの白狼軍の行動は不分明な部分も多い。この時期に白狼軍内に入っていた工藤の資料は、時期的には嶋本の研究の後に続くものになる。嶋本のこれら一連の研究での視点は明確であり、義兵性と革命性の強調がなされている。1913 年 7 月・8 月段階を対象とした最後の研究では、「まず前提とすべきは、河南における第二革命の主体は白朗軍であった」し、「この時期、白朗と革命派の戦略はぴったり符合し、革命派側の白朗援助の意思はみられるものの、実質的な資金や武器援助という点では、ほとんど無きに等しい状態だったといえるのではなかろうか」と、白朗集団の革命性の強調と、革命派による白朗支援の意思があったことが主張されている〔嶋本 1990: 55・61〕。しかし、白狼軍が河南の「第二革命の主体」といえるかという点、革命派の支援意思という点、いずれについても工藤資料は大きな疑問を投げかけるのである。

また今井駿は、ビリングズリーの研究〔Bilingsley 1988〕も参照しつつ、「いずれの史料も、攻略の計画性・組織性を物語るものであり、流寇運動というものが、けっして飢民のような「にわか土匪」による場当たりの掠奪行為ではなく、専業土匪によってある程度計画的・組織的に展開されたものであることを示している」し、「スローガンから見ても布告から見ても、白朗軍を「農民反乱軍」であったと規定することは無理があり、これはやはり飢民・乞食・失業＝反乱兵士・土匪などから構成されるルン・プロ集団が流寇化するにあたって軍の体裁を整えたものと考えられる」と結論している〔今井 1991: 101・95〕。実際、白狼軍はすさまじいスピードで長距離遠征を行っており、十分な情報を得た上での行動であったことと、哥老会などの会党との関わりを勘案すれば、白狼軍は「農民反乱」という言葉の中に溶解させてしまえるような存在ではなかったことは確かであり、本研究では白狼軍の土匪たちを“盗賊化した専業武力集団”としてとらえた

い。

イギリスの研究者で中国語・日本語に堪能なビリングズリーの「土匪」に関する広範な研究は、中国や日本の白狼軍研究を広く参照していて、かつ欧米宣教師の記録なども多用して非常に有用であり、その日本語翻訳が利用しやすい〔ビリングズリー（著）、山田潤（訳）1994〕。彼は白朗を「社会派義賊」と呼び〔同: 254〕、1913 年 10 月前後には孫文・黄興を含む革命派の影響が強まっていたことを述べるが〔同: 330〕、これら革命派と白狼軍との強い関わりという説には前述のように工藤資料が疑問を投げかける。なおビリングズリーには「農民土匪から著名人へ」と題した研究もあるが、白朗研究史と“白朗の現在”を追った研究であり、新史料の発掘はない〔Bilingsley & Xu Youwei（徐有威）2004〕。

ごく最近、論文集『民衆反乱と中華世界』が公刊され、清末以前の「民衆反乱」を取り上げ、活動地点で実地調査をして基層社会の歴史から反乱集団を検討しようとしている〔吉尾寛(編)2012〕。「民衆反乱」史研究の新動向と云う。史料不足のために白狼軍研究は最近20年ほど停滞していたが、新史料を提供する本研究によって研究を深化・進展させるのみならず、このような新動向にも寄与しうるのであることを確信している。

### 3. 工藤忠の白狼軍関係資料について

「工藤忠関係資料」の概要については拙著「補論」の概括的説明を参照していただくことにし〔山田2010:358-362〕、ここでは行論に必要な範囲での説明にとどめたい。

まず工藤の前半生の自伝「手記」から簡単に説明する。東京国際裁判で証言した溥儀への日本でのバッシングに対して、工藤は『皇帝溥儀』〔工藤1952〕を書いて溥儀を擁護した。山田純三郎の甥にあたる佐藤慎一郎がこの出版から暫くして工藤にインタビューした録音テープがある。しかし『皇帝溥儀』も、この録音も、時間的経過に沿ってまとまりよく説明したものではなく、記憶違いによる誤りも一部に見られる。特に録音はかなりばらばらな内容である。そのため晩年になって改めて自伝執筆に取りかかったのが「手記」である。これは1958年（工藤75歳）～1962年（79歳）頃に書かれた。しかし自伝とは言っても、生誕から1914年（工藤32歳）の第1回甘粛旅行までしかない。その意味では完全な前半生の自伝というわけでもないが、時間的経過に沿った詳細かつ貴重な情報を提供している。ただし記述の元になった日記類などは残されておらず、一部については過去に書いた報告類に依拠したとみられるが、多くは記憶に頼っている。記憶違いも目につくが、執筆段階の年齢を考えても相当に優れた記憶力だと認められる。戦後に書かれたため、本人は新かな遣いで記述を意識しているが、旧かな遣いがむしろ多いくらいである。また晩年のこの文章では、工藤の津軽弁による「し」と「す」などの誤用が多い。原文を正確に引用すると、このような訂正を多数記載しなければならないので、できるだけ原文の雰囲気を残すため原文の文字を生かしつつ新かな遣いを主とし、「し」「す」などの誤用は修正する。原文には段落がないが、引用では適宜段落と句読点をつけ、常用漢字を主とする。文字修正は〈〉、文字補充は〔〕で示し、その他必要な説明は〔〕内に簡単に記す。

この「手記」のうち、張振武革命軍への参加をめざしたが誤報と知って引き返したこと、漢口から南京に行って第二革命軍に参加したこと、南京を脱出して漢口に行き白狼軍に向かったこと、白狼軍から帰還して上海を経て日本に行き孫文と黃興に白狼軍との連携を勧めたが拒絶されたことなどの一連の経緯が書かれた部分を本研究で史料として利用する。

次に利用するのは、工藤が中支那派遣隊司令官白川義則大佐に提出した前記「漢口日本駐屯軍に提出せる報告書」である。この「報告書」草稿の現物は、現在見られない。上記「録音」によればこれは鉛筆で書かれていたとみられる。工藤が「手記」をまとめた時にそれに添付する形で、改めて「手記」と同じ原稿用紙に草稿の原文をそのまま書き写したものが残ったのである。これ

は、「手記」に、「余は周家口に居る間に漢口の駐在日本司令官に提出する白狼軍の行動等を〈の〉報告書を書いた。其の草稿が今手元に在るから茲に書せん」とあるように、葉県で捕えられ、窮地を脱して周家口に到着して書いたのである。これを白川司令官に提出したのだが、その草稿を残しておいたようである。その通りであれば、工藤が周家口で書いた時点（1914 年 1 月末～2 月ころ）までの筈である。ところが、「報告書」冒頭に「顧みれば欧州の動乱発して早、既に四歳」とあるように、1914 年 7 月の第一次世界大戦発生からあしかけ 4 年ないし満 4 年の時期に書かれた、即ち 1917 年ないし 1918 年に書かれたものであることが明瞭である。

この疑問を解く鍵は、工藤が結婚して青島に住んだ時、青島守備軍参謀長奈良武次少将に対して大正 4（1915）年の年末から上海の革命派の動向や上海の軍事情報を送っていた中の大正 4 年 12 月 21 日付の報告中に、「白狼記も近日中に御送付申し上候」とあることによって得られる。この年末から 1916 年初めにかけて上海から報告を続け、その後第三革命の中で山東の革命軍に入り、中華革命軍東北軍の諸城方面「最高顧問」として事実上 1 万の兵を率いて活動し、6 月の袁世凱の死亡によって 1916 年中に東北軍が解散するまでは「白狼記」を書きあげる余裕はなかったであろうから、奈良への送付は 1917 年以降にずれ込んだ可能性がある。したがって敗戦後まで残されていた草稿は 1914 年の白川宛ではなく、1917 年頃の奈良宛のものであるとすれば、この記述の疑問点は解決できる。

そうであっても、工藤が白狼軍内に入り、白朗以下の幹部にも会っているのであるから、白狼軍内部に関する情報は他に類例のない貴重なものであることは疑いようがない。工藤が白狼軍を去って以降の情報も書かれているが、これについては以下のように考えられる。工藤は各種新聞や日本の『支那』などの雑誌の記述や、工藤とともに白狼軍から帰った革命派からの情報や会員だった江湖会ルートの情報もあったに違いない。しかも、白狼軍が陝西省・甘肅省から 1914 年 6 月末に河南省に引き返して 7 月末に滅亡したが、その直後に工藤は升允の使命で復辟派として甘肅に旅行して白狼軍の去った後をつぶさに見ていたし、甘肅回族の有力者に会った際秦州の激戦などについて話を聞いたことも考えられる。従って、「報告書」の陝西・甘肅情報も極めて信頼性の高いものになる。要するに、現在まで残された「報告書」は実地の見聞に依拠したもので、工藤が白狼軍を去った 1914 年 1 月以降の陝西・甘肅などの記述についても、かなり正確な情報だとみてよいのである。

「報告書」は、白川義則中支那派遣隊司令官宛報告をベースにして、その後知り得た情報も含め整理して奈良武次宛に出したものとみられる。それが 1917 年だとすれば、奈良は日本に帰っていて陸軍省軍務局長という要職に就いていた〔波多野澄雄・黒沢文貴（編）2000：4 卷「履歴」〕（注 5）。工藤は、奈良に対して真摯な態度で「報告書」を書いたものと推測できよう。文体は当時のままなので旧かな遣いとする。常用漢字を主とし、適宜段落・句読点を付すなど「手記」と同様とし、参考文献の後に資料として掲載した。

## 4. 工藤忠の白狼軍関係資料の検討

### 4.1. 「手記」の白狼軍関係記事とその検討

#### 4.1.1. 第二革命の南京から漢口へ

「はじめに」で述べたように、1913年（民国2年、大正2年）3月22日、国民党の実質的リーダーの宋教仁が袁政権側によって暗殺された（3月20日上海駅で撃たれ、22日死亡）。これによって一挙に第二革命の気運が噴出した。工藤は張振武が武昌で革命軍を旗揚げしたと聞き、「張氏は余と寝食を共〔に〕せし安南の志士南広中の紹介せし同志。此の機逸すべからずと」、張の所在を追って漢口から河南に入り、誤報だと知って周家口から漢口に引き返し（注6）、さらに南京の革命軍に加わった。

黄興が7月14日に上海から南京に入り、江蘇都督の程德全に迫って南京の独立を宣言させ、自ら江蘇討袁軍総司令となったが、形勢不利を觀望した黄興は早くも同28日に南京を脱出してしまった。その後、何海鳴が南京に入って8月10日に臨時総司令となり、20日に柏文蔚がやってきて都督となった。工藤は「余、柏文蔚氏とは旧交あり。面接して余の志を述ぶ。柏氏喜び、余を迎う。余誠心誠意彼れと死を共にする事を誓う」というように旧交があった柏文蔚の下で革命軍の1員として奮闘した。このとき、何海鳴と柏文蔚の間では反目が絶えず、ために南京の先行きは暗く、袁世凱の派遣した馮国璋と張勳の軍が迫っていた。因みに、工藤は後年この張勳の復辟事件の際に深く関わる。この何海鳴を支援していたのが金子克己であり、金子は何海鳴側の状況を述べている〔金子1996：76-79〕。この南京籠城戦の際に工藤は蔣介石に会ったが、「余は珍らしい青年だとは思ったが、後にあんな大物になろうとは全く想像もつかなかった」と感想を述べている。

しかし、革命軍の劣勢は明白であり、革命派は南京を続々と脱出し、ついに9月1日、張勳の軍が南京を占領した。工藤も8月30日には佐藤嘉平次という日本軍将校と船で脱出した（注7）。船中、工藤は革命派と連携させるために白狼軍に入りたいと話し、佐藤は四川省で画策したいと話した。漢口で佐藤と別れて投宿していると、漢口の中支那派遣隊司令官白川義則大佐から呼び出しを受けた。白川が言うには、「君は此度白狼軍に投ずる為河南省に行くとの事〔だ〕が、目下白狼軍は神出鬼没で、其の拠所さえ不明である」「実際どうなのかは誰にもわからない。我が漢口駐在日本軍でも白狼の正体を知りたいのだ」ということであった。白川は佐藤から工藤の白狼軍への関心を聞いていたのである。承諾した工藤に、白川は護照2通（「井上政太郎」・「田口三郎」名）を与えた。

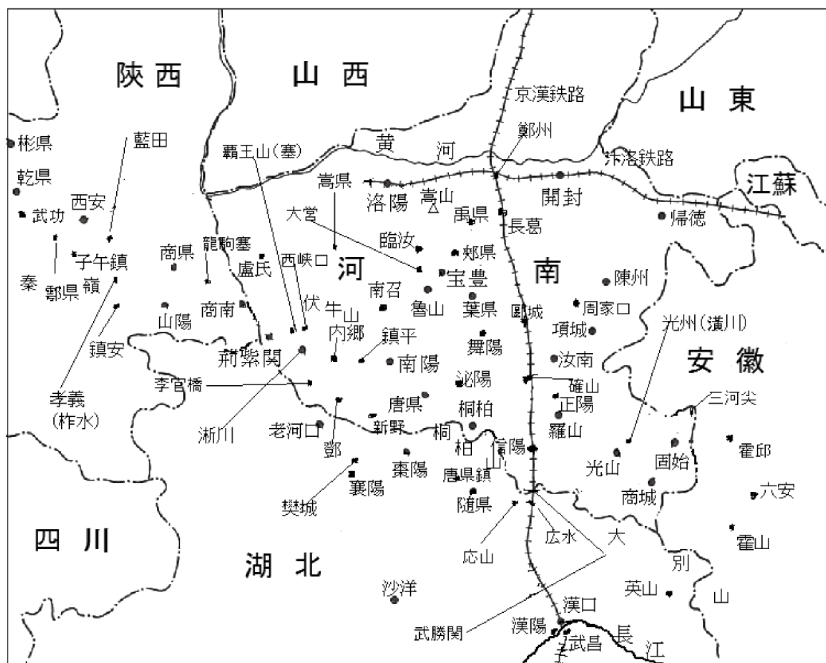
#### 4.1.2. 白狼軍へ入り、革命派2人に会う

工藤は「労働者の服を着し、南京に於て得た革命軍の腕章と爆弾製造に要する塩酸カリと黄雄（雄黄）を少し携持す（注8）。腕章は衣服に縫い付け、何人が見ても田舎農夫と見える様に変装して漢口駅を出発した」。そして武勝関の南の広水駅で下車し、西に向かった。当面の目的地は



交易地として繁栄していた湖北省北部の老河口である。応山・随・唐県鎮・樊城を経て老河口に至り、そこで歯科医を開業していた成田貞次郎に世話になりながら、やがて哥老会の長江中流地域での変名「江湖会」の首領謝達に会う。工藤はこのとき、江湖会会員になっており、その入会儀式については拙著で紹介した〔山田 2010: 67-69〕。

謝達は工藤に紹介状をやり、かつ江湖会会員の陳もつけてくれた。白狼軍は荊紫関にいるという情報に従い、老河口からその地を目指し、河南省の鄧県・李官橋を経て淅川県城まで行ったが、そこから先は極めて困難であり、事情に通じた陳でもこれ以上は危険だと判断して老河口に引き返した。白狼軍が棗陽攻撃から河南に戻った 10 月頃は西河南が「無政府の状態を呈」（「報告書」）していたが、この淅川までの旅はその頃の可能性が高い。



〔1913 年前後の河南省の地図〕

この間の道中は極めて困難であった。工藤は、「全く戦争の巷である。部落と部落の間、毎晩の掠奪戦争である。城壁のない部落は木を伐って矢来を組んで守りをする」、「土匪猖獗を極め白昼旅行者は皆無である。全くの無政府状態で私刑は到る所に行われる模様であった。全く弱肉強食である」と、すさまじいその状況を述べている。工藤自身、攻撃を受けた場所で約 1 週間防衛戦に参加したくらいであった。

改めて老河口で謝達に会ったところ、「大道で芸を演ずる軽業師趙某を呼んで、これを連れて行けと云っ」たので、この趙とともに出発した。この趙は「どんな間道でも心得ていてずんずん案内してくれ」たという。しかし昼は危険なので歩かず、夜ばかり歩いた。慣れない人間には到

底無理な道中であった。そして遂に白朗の部下に会ったのである。

名もなき山間の山寨に夜中訪問した。大江山の酒呑童子のような大きな男である。頗る警戒を嚴重〔に〕して部下数十人を従え、何所に掠奪に行く所であった。無論チャンと武装して青龍刀や銃をたずさえていた。余は南京政府の使だと大きく出たら、頗る鄭重に自分の居所に伴って待遇してくれた。而して一つ八卦を置こうと云って火縄銃に火を付け、ブンマワシの様にぐるぐる廻る様に仕掛け、銃の発射した方向によって運不運を定めるのだ。実に危険極まる八卦である。銃の発射した方向を見定めて、「よろしい、我事成れり」と云って、私を連れて行ったのが荊紫関である。（中略）余は謝達氏の紹介と趙氏の路案内で漸く入る事を得たのである。

荊紫関は湖北・河南・陝西の三叉境上に位し、各方の物資集散地で富豪又少からず。白狼即ち貢賄を容れ、兵を犒い、労を休むる所とした。此の所に約二万の白狼軍が駐在して居った。何にしる南京の使が来たというのでその歓迎は大変なものであった。余は兼て用意して居る革命軍の腕章と謝達哥老会長の紹介を提出した。白狼軍の首領白朗氏直接に余と掘（握）手して、而して各首領である孫玉章、王生岐、白金堂、宋老年、李鴻賓、王成敬、候（侯）義、魏老八の諸氏を紹介せられた。此の夕大いに宴を開いて、余歓待を受け、余は面目を施した。

工藤はこの「手記」で明確な月日について記していない。大部分は記憶に基づいて書いたために難しかったのかもしれない。ともあれ、9月上旬に漢口に入り、そこからこの荊紫関に入るまでは、以上の経緯からみて1カ月ないしそれ以上の日時が必要だったと認められる。早くて10月下旬、あるいは11月にずれ込んだかもしれない。そして、大首領白朗のみならず、白狼軍の主要な首領たちのほとんどと面会したのである。この際、江湖会首領の紹介状が大きな意味をもったことは、白朗軍と江湖会のつながりの深さを示すものである。なおこの危険な銃占いは宋老年の易占いと同様、白狼軍内での占いの一つだったのかもしれない。工藤はこの荊紫関にいた白狼軍内で革命派2人に会った。

夜遅く余を訪問する二青年があった。傍に人が居らないのを見て、余に向ってお前は日本人だろうと云い出した。そうして曰く、宮崎滔天を知っているか、萱野長知を知っているか、中久喜周州（信周）を知っているかと聞く。知っていると答えると、日本人だという事を誰にも云うな、自分等は雲南省の者で、年上の青年は竇家法（注9）と云い、年下の青年は張敬幸と云う二十五六才の青年で、共に雲南省の革命家である。彼等は、第二革命軍が破れたから漢口から此の地に來り白狼軍に頼りて、大いに為すあらんとして白狼の中に入り、現在は軍の參謀として行動を共にしている。君も參謀として此の地に留り白軍の為に尽力して呉れいと云うのである。

これ以降工藤は、言葉の関係から上海人王鉄石として參謀となる。注意しなければならないの

は、工藤が南京革命軍の腕章を示して白朗に会った際に、工藤が日本人である事を疑い、その場では何も発言しなかった竇・張両名以外革命派の人間はだれもいなかったとみられることである。なお、後、工藤とこの萱野長知とは第三革命の山東革命軍で深く関わり合い、中久喜信周（工藤の友人中久喜信弘の兄）は漢口で揚子江通信社を営み、1914年に工藤が甘粛に旅立つのを漢口駅で見送った。

またこの時当然のことながら、工藤は南京の状況を説明した筈である。それ故、黄興が早めに脱出して、次いで何海鳴・柏文蔚も脱出して第二革命は敗北に終わったことを大首領白朗以下の首領たちも理解したとみられる。もちろんこれ以前に一足早く白狼軍に入っていた竇・張からもある程度聞いていたであろう。学説史で挙げた研究の中には、白朗たちは1914年に安徽方面に進出するまで第二革命の失敗を知らずにいたとする説も見られるが〔ビリングズリー（著）、山田潤（訳）1994:331〕、その解釈は全く成立しない。南京陥落直後、安徽省の土匪が白旗に「第三次革命」と大書していたという〔『申報』：1913年9月14日〕。早くもこの時期、土匪の間でも「第三革命」を標榜するものさえ現れており、卓越した情報網を有する江湖会（哥老会）などの会党の存在を頭に入れると、白狼軍が1914年まで何も知らなかったというのはありえないのである。

#### 4.1.3. 白狼軍の日常と根拠地霸王山

次に工藤は白狼軍の日常とその根拠地霸王山について伝えている。これは具体的な白狼軍内部情報として他に全く見られない貴重なものである。

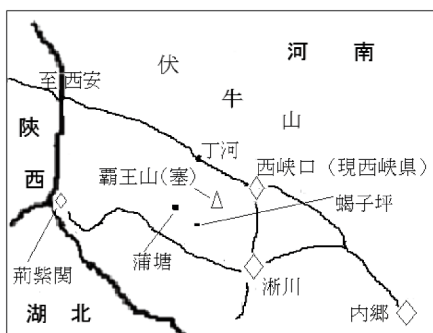
此等の白狼軍の人々は毎日何をしているかと云うと、鉄砲を磨いたり、丸を磨いたりするだけで何もしない。此の白狼軍に対し、官軍は買収にかかっている。それは官軍の常套手段で誰々を師団長〔に〕するとか誰々を旅団長にするかと〈とか〉、位と金で買収するのである。而して一朝妥結すれば、妥結の宴を開いて一堂に集めて一遍に鑿殺しようという計画なのだが、白狼軍ではよく知っているから其の手には乗らず、金だけ取ってやれという考〔え〕で居る。だから七八箇師団以上の兵に囲まれながら平然としているのである。彼等は自分の土地だから自分の屋敷の中を行来する様なものだし、そうして官軍は案内不充足である。彼等は毎日毎日前線からの報告を聞きながら、何事も無いように博奕を打っている。官軍が二里一里とだんだん迫って来るのを待って、愈々というところで一斉射撃を食わす。

散散官軍を悩〔ま〕して裏を廻り、根拠地である霸王山に引き上げる。包囲している官軍は戦を欲しないから決して大戦争にはならぬ。官軍の中には以前から土匪と連絡して弾丸を売っているやつもあり、又隊長で土匪を兼ねているやつもあるのだから、其の辺は自由自在である。余も白狼軍と一緒に霸王山へと行った。此の地は盆地で、人家約一千戸は農業を営み、楽に一万五千人位の人々を収容する事が出来得る。而して四面皆山で、一夫防げば万夫も破り難き金城鉄壁とも称すべき案〔安〕全地帯だから、官軍も遠く取巻いているより仕方が無かった。

白狼軍は遠く遠征して帰い〈えっ〉て此の地に休養する。彼等は又霸王山の盆地の住民は勿論、此の一带の住民に対しては決して奪掠をしない。彼等が携え来りし物資は勿論、金銭をも与えるのであるから、住民は喜び迎え何に角に「〔なにかに〕」と便利を図ってくれるのである。

ここに記される白狼軍の日常は、全く生産から遊離した専業武力集団と規定できるような存在であったことを示している。他からは掠奪して根拠地では民衆に恩恵を与えるのである。そして、この根拠地霸王山であるが、工藤は「報告書」で、白朗の出生地宝豊県に隣接する魯山県の槐樹嶺に最初の根拠地を置き、ついでこの霸王山に置いたとしている。この根拠地問題には「報告書」の検討の際に言及したい。

「報告書」によればこの霸王山は孫玉章の根拠地だった。「霸王寨は蒲塘の北十二清里、重疊連亘する群山の中、巍然として秀づる一峰の頂上に在り」「蒲塘は四面連山を以て囲まれたるも、その挿針〈鉢〉に似たる内底は平野にして復豊饒」とあるように、麓の蒲塘の村と山上の霸王山という一帯が白狼軍の根拠地となっていた。10 万分の 1 地図には当時の内郷県西部、今日の西峡県の地に蒲塘があり、この蒲塘の東北東約 12 キロの高山の山頂に「霸王砦」が記されていて〔陸地測量部 1935：北峪〕、距離的には「十二清里」の 2 倍であるが、これが霸王山(寨)に該当するものと認められる（注 10）。『西峡県志』に見える「霸王寨」（海拔 937 m）について白朗や孫玉章との関係には触れていないが、「位於丁河郷蜆子坪、五里橋郷赤水溝両地間」とあり〔西峡県志編纂委員会 1990：85〕、「赤水溝」の位置は調べがつかないものの丁河郷と東隣の五里橋郷との間にある山寨であるし、工藤が荊紫関から蒲塘経由で霸王山に至っているので、この「霸王寨」が 10 万分の 1 地図の「霸王砦」（高さも合致する）で、かつ工藤の言う「霸王山」に間違いはないと考える。



〔霸王山（寨）と蒲塘の位置〕

この霸王山を白狼軍の根拠地とする記述は他には見えない。ただ『申報』の記事で、10 月 18 日の盧氏県城襲撃、老河口は酒肉を送り掠奪を免れたなどを伝え、「白狼所親領之大隊仍在南陽府之西内郷県」と白朗の本隊が内郷県に居たことを把握していたことが目につく程度である〔『申

報』: 1913 年 10 月 31 日]。この霸王山は、北に西峡口から西に西安に通ずる道が走り、南も淅川県から荊紫関を經由して陝西に通じていて、四方への交通の便がよい所で、しかも防禦に容易な高い山であった。義賊的活動をしてきた孫玉章への信頼もあって、安定した白狼軍の根拠地となっていたものとみられる。

#### 4.1.4. 霸王山を出て、葉県で捕えられるも目的地周家口に着く

工藤は革命派との連絡をつけるべく、霸王山を出ることにした。それは「正月」の「二日」だという。白狼軍内では民国元年に採用された西暦ではなく旧来の旧暦によっていたとみられるが、この「正月」は西暦の民国 3 (1914) 年 1 月である。なぜなら、白朗軍は 1914 年 1 月 25 日 (旧暦の除夕) に安徽省の六安を攻略して旧暦元旦 (西暦 1 月 26 日) にそこで新年を祝っていて [閑雲 1956: 144]、この前後安徽方面にいたから [杜春和(編) 1980: 85-105]、この「正月」を旧暦だとはできないからである。1 月 2 日の出立に際しては、白狼軍から危険だと言って止められた。

余等此の霸王山に居る事月余、愈々革命軍との連絡を取る事に一決し、余と竇・張の二氏と共に王と云う案内者を連れて霸王山を脱出する事に決した。白狼軍の多数の隊長等は、余等の行を危ぶみ曰く、周囲は悉く官軍に取巻かれい〈お〉るから突破する事甚だ困難である、と云って止められたが、行くと云った以上は行くのだと無理に押切って出発した。正月元旦を此の霸王山に於て盛んに挙行す。愈々白朗氏に別を告げたのは翌二日の早朝である。二千頭以上もいるの中から選り出した俊〈駿〉馬に跨って出かけると、隊長等は一里余を送って来た。

こうして出発した工藤・竇家法・張敬幸・王の 4 人は、霸王山から南陽を目指し、ついで南陽から北に南召県、そして東に魯山県を経て葉県まで行った。その途中多くの危険にあっている。霸王山を出てすぐに兵隊につかまりかけたが、指揮官は元内郷県の守備隊長をしていた人物で白狼軍に降参した時に殺されずに済んだため恩義を感じていたとみえて、見逃してくれた。さらにその後兵士 2 人に見つかったが、逆に 2 人を殺して難を逃れもした。その道中の危険さは次のようであった。

大道に出るまでは頗る危険で、昼行は困難である。夜行すると各村の警備が厳重で、余等四頭も歩くとかなり大きな馬の足音がす [る] ので、村々では土匪かと思うて城壁から喇叭を鳴らして銃を撃つ。道をかえて他に往く。又同じく銃を撃たれる。(中略) 一朝官兵に捕えられんか。銃殺は免かい〈がれ〉られないのである。其の危険な事筆舌に及ばない。斯くして此の困難を突破して南陽府の大道まで来た。此の辺は治安が保たれて居るからいくらか安心した。(中略) 而して途中宿屋に泊まると巡検が毎晩三度位やって来て不審な者があるとつかまえるので、その度におるおるする。(中略) 魯山の城外に宿泊した。巡検の厳しき事甚だしく、一夜三度の巡検である。

村々の自衛警備と巡検（警察）の取り締まりが厳重で、切り抜けるのが容易ではなかった。葉県では巡検の取り締まりがさらに厳しく、城外の宿泊も許されず、乗馬も取り上げられ、身体検査をされてピストルをとられてしまった。張敬幸と王の2人はどこかへ姿をくらまし、残った工藤と竇家法の2人には命の危険が迫った。工藤はそこで白川義則中支那派遣隊司令官からもらっていた護照を使うことにした。

余は此に於て奮然として吾れ等は日本人である。之を見よと、所持するところの護照を見せた。（中略）而して直ちに県役所の牢獄に繋がれた。余等は漢口の日本商店丸三洋行の店員で葉の代金を集〔め〕に来た者であると主張したが、彼等は信じない。然し護照の手前黙殺する事が出来ないので、日本語の解する人を探して居る四日間、牢獄に抛り放してある間に吾々を銃殺に処するという告示が貼られたのだ。

井上政太郎名の護照は工藤が使い、田口三郎名のものは竇家法が使ったが、竇家法が日本語を話せないのが危険な要素だった。やがて日本語のわかる中国人が来て取り調べた。「同所に師団長・旅団長を初め県知事等数人席を同うして、余等を手錠を懸けた儘、日本人か否かを日本語を解する通訳を以て調べた」。その結果、工藤が日本人であることはすぐわかったが、竇家法が問題だった。工藤が彼は日本語を話せない朝鮮人だと強弁してなんとか切り抜けた。そのころには中国側から照会を受けた漢口の日本領事館から、井上・田口両名は確かに日本人だという電報が入っていた。かくして2人は処刑をまぬがれたのである。なお、工藤は師団長などと書いているが、中国の「師長」、「旅長」を日本の名称で書いたのである。護照は漢口の丸三洋行の店員として登録されていた人物名だったのであり、当時の陸軍の諜報活動ではこの程度の操作をするのは容易だったであろうし、漢口などの日本人経営洋行などは諜報活動への協力を日常的に行っていたとみてよい。

その後、県知事はがらりと態度を変えて2人を待遇した。そして「葉県を立つ時には騎兵一箇中隊ついて喇叭を吹いて京漢鉄道線の鄧城まで送ってくれた。斯くして余等は漸く所謂死線を越えたのだ」。鄧城から東に目的地の周家口に行き、岩手県盛岡の人で商売をしていた菊地円蔵のもとでやすらぐことができ、そこで司令官宛の「報告書」を書いたのである。この逮捕・釈放の経緯がかなりデフォルメされて伝えられた風説が、『申報』1914年2月14日の記事「某国軍人被拘之風説」だとみられる〔山田2010:70〕。

資料の現物では、「手記」に続ける形で、ここに「報告書」が入っていて、その後に、再び漢口に帰って以降の「手記」の記述が続く。時間の経過を見るためにも「手記」の記述を追うことにしたい。

#### 4.1.5. 漢口から上海、そして日本で孫文・黄興に会う

工藤と竇は周家口を出て、鄧城駅で京漢線に乗車し、漢口に帰ってすぐに白川義則中支那派遣

隊司令官を訪問し、「報告書」を提出した。その時、白川は「良く生きて帰え〔っ〕て来たな」と言った。それというのも、銃殺されそうだという報告があったからだという。さらに電話で漢口日本新聞社主筆吉福四郎を呼んだ。吉福から話を聞くと、「数日前、突然、張と云う支那人が新聞社を尋ね、今、葉県に於て日本人が官軍に捕縛せられ、銃殺せらるる事であるから、至急救助して呉れと知らせがあったから、軍司令部に問い合わせたら、確か井上政太郎及田口三郎の両名が河南省に入〔っ〕て居るとの事である」ので、鄆城に行き、さらに葉県に行つて知事に会つて2人が無事だったことを知り漢口に帰つたという。「張」は張敬幸だとみられ、彼は葉県で捕縛されずに生きていたようである。

吉福は工藤に対して、(北京の)日本公使館が工藤の行動は不穏だという理由で退去命令を發したので、捕縛されかねないからすぐ日本に帰つた方がいいと言つた。そこで急いで上海に行った。工藤は「漢口日本軍駐屯軍では、余に白狼行動を調査して呉れと依頼して居りながら、余の退去命令に対して一言の弁解もしてくれないのは不信である。余等は命がけで軍の爲め、日本の爲め〔に〕なると思つて動くのである」と軍に対する強い不信感を表明している。上海では竇家法とともに白狼軍との連携を革命派に説いた。しかし、「上海新聞に、白狼軍参謀日本人工藤鉄石、支那名王鉄生と、革命黨員同じく白狼軍の参謀竇家法の両名上海に來り、革命党幹部と聯絡を取ると云う記事が大々的に書かれてある。実に危険極る」といった事態になり、2人は日本に行くことにした。

帰国した工藤は旧知の人々や政治家・軍人たちに話をし、宮崎滔天の勧めで外務省でも松井慶四郎次官と小池張造政務局長に話をした。外務省では謝礼として工藤に200円を与えた。そして孫文・黃興に会つたのである。ここは孫・黃2人の考えが明確に表明されていて、白狼軍と孫・黃の關係を考える上で極めて重要な史料なので全文を引用する。

そうしている中に、竇家法氏の念願である孫・黃両先生に会う日取りも定つた。余と竇氏とは、宮崎先生の案内で孫先生を頭山満先生邸に訪ねた。孫先生は眼光炯炯として人を射り、威風堂々犯すべからざるの威圧を感じた。實に一世の英傑である。曾て白狼の参謀たる竇家法氏は白狼の魁首等を集め、革命の理想を説き、袁政府を倒さざれば支那国の滅亡するを論じ、而して今袁軍を破り天下に覇たらんと欲すれば先づ革命軍と聯絡を取り、相呼応して立たざる可からずと。即ち白狼及魁首等の賛成を得、而して遠く日本に渡り、先生に会する事を得たるは、光榮之れに過ぎずと述べ、而して竇氏は熱弁を振うて白狼軍の勇猛無比を説き、之を利用して袁政府を倒さざるべからざるを論ず。時に孫先生曰く、白軍は無道にして人を殺し、家を焼き、強姦奪掠、至らざるなく、尚又外国人に危害を与へし事、属々あり。斯る無道の軍と聯絡せんか、我が革命党史の汚点となるのみならず、袁政府は事實無根の事を極力土匪軍と革命軍と聯絡あるが如く世上に吹聴す。其の同情を失わしめ、以て立つ能わざらしめんと欲す。然るに今白軍と通ぜんか、之れ袁が術中に陥るものと敢て変らざる可し。故に聯絡せじとも、同じく革命の思想あるものならば、別々に旗を挙ぐるも敢て変らざるべし。極力京漢鐵道を〈の〉破壊

を図り、其の行路を絶ち、外国人をして袁政府が逆でも統一し能わざるを信ぜしめ、而して借款の破談を図るは第一案なり。汝等帰りて此の事を白軍に提言し、以て袁政府に当るべしと。敢て具体的の聯絡をなさず。

次に黄興先生とは宮崎滔天先生の邸に於て会見して、其の意見を聞く。黄先生曰く、白軍は天下の公敵なり。今之れと通ぜんか。国民の信を失うは勿論、又数十年来の革命史の汚点とならん。若し彼等を利用して大事成れりとせんか、後又彼等を殺さざればならぬ事に至らん。然る時は袁政府と敢て選ぶ所なかるべし。勿論彼等の勇猛無比なるを知る。然りと雖も遺憾ながら、斯る次第なる故、聯絡不可能なりと。其の他柏文蔚・陳其美・熊克武等の重なる人物と会す。聯絡の必要なるを唱へたるも、孫・黄氏等斯の如き有様なるを以て如何共する能わず。遂いに空しく帰る。孫・黄両先生唯自己の理想を説き、実行に遠し、又難いかな。

この記述から、霸王山脱出前に竇家法が白朗以下に革命の理想を説き、革命派との連携を進めることについて了解を得ていたことがわかる。なお後述のように「報告書」で工藤は、竇・張両名以外革命派は1人もいなかったことを強調している。このように革命の理想を説いた竇の努力で、少なくとも白朗たちも親革命派の心情を強く持つに至ったとみてよい。しかし竇の熱弁にも関らず、孫文と黄興の2人は冷静であった。白狼軍の残虐性を知りながら手を結ぶことは、盛んに革命派と白狼軍のつながりを宣伝している袁政権の術中にはまってしまう（注11）、「革命党史の汚点」になると孫文は言い、黄興もたとえ彼らと手を結んで革命が成就したとしても、そのあかつきには彼等を殺さねばならなくなると、これまた冷静に答えている。結局、白狼軍との提携話は不首尾に終わったのである。

この孫文・黄興の発言は、その場にいた工藤が残したものであり、1914年3月・4月段階の2人の考えは明確だった。もし、それ以前に孫・黄が白狼軍と手を結ぶ策略を推進していたのなら、（ともに政治家でしたたかなので断言はできないが）このように明言できなかったのではないと思われる。ともあれ少なくともこれ以降、孫・黄2人の对白狼軍路線は明確だったとみてよい。学説史で述べたように、白狼軍関係の研究では孫文・黄興が白狼軍に働きかけたことを大なり小なり強調している。しかし、孫・黄の肉声によれば、そのような説は「袁が術中に陥」ったものになりかねないのである。

この会談に関する貴重な史料が外務省の外交史料館にあり、最近ようやくこれを把握できたので本研究を進めることができた。支那「革命党関係」と題したファイルの中に日本の司法当局による亡命者孫文・黄興の動静監視記録があり、そこに「工藤鉄太郎」「宝柯芳」という名が出てくる。彼等は工藤鉄三郎と竇家法だと考えられる。以下4点引用する。

#### ① 大正3（1914）年3月23日10:30～11:50 工藤と竇の孫文訪問

「一、全十時三十分、工藤鉄太郎、宝柯芳（宮崎ノ紹介ニテ）来訪。孫ト対談。全十一時五十分退出」（3月24日の「孫文ノ動静」報告）〔アジア歴史:B03050075000〕



## ② 同年 3 月 23 日 14:30～16:30、工藤と寶が黃興を訪問

「一、午後二時三十分、宮崎寅蔵、工藤鉄太郎、宝柯芳同伴来訪。応接室ニ於テ面談。全四時三十分辞去」(3 月 24 日の「黃興ノ動靜」報告) [アジア歴史: B03050075000]

## ③ 同年 4 月 3 日 17:40—19:00、工藤と寶が孫文を訪問

「一、午後五時四十分、宮崎寅蔵、工藤鉄太郎、寶樗(?) 芳ノ三名来訪。孫及ビ陳其美ト密談ヲナシ、工藤及ビ寶ハ同七時、宮崎ハ同七時三十分、陳ハ同八時退出セリ」(4 月 4 日の「孫文ノ動靜」報告) [アジア歴史: B03050075100]

## ④ 同年 4 月 4 日 10:25、寶は再度黃興を訪問するも門前払い

「四月四日 一、午前十時二十五分、宝柯芳来訪セシモ本人ハ病氣ト称シテ面会ヲ謝絶セリ」(4 月 5 日の「黃興ノ動靜」報告) [アジア歴史: B03050075100]

この前後の支那「革命党関係」ファイルを通覧すると、当局の監視が如何に厳しかったかがわかるが、詳細な記録ではあっても監視者が氏名記載の面で誤記している場合も見られるので、「工藤鉄太郎」と「宝柯芳」は誤記とみてよい。これらにより、孫文には 3 月 23 日と 4 月 3 日の 2 回会い、黃興には 3 月 23 日に会ったが、寶家法が 4 月 4 日に再度黃興を訪問した際にはもはや会わなかったこともわかる。これらによって、工藤「手記」の記述を具体的に裏付けることが出来るのである。

時間的推移から見て、まず 3 月 23 日午前には孫文に会って 2 人は来意を説明し、同日午後には黃興に 2 時間話している。あるいは孫文はそういう話ならまず黃興に話せと言ったのかもしれない。黃興は工藤が伝えているように、提携を拒絶した。しかし 2 人はあきらめずに 4 月 3 日孫文を訪問して強く要請したが、黃興と同様拒絶した。その場には孫文の片腕で軍事面でも活躍していた陳其美も同席していた。打開しようとした寶は翌 4 月 4 日に黃興を再訪したが、謝絶されたのである。工藤はこのときはもう無理だと判断したのであろうか、寶に同道していない。このような実に生々しい経緯がわかる。

工藤自身はこの件で革命派に幻滅を感じていたが、復辟派の大物升允に会ってから「一朝にして革命党變じて宗社党となる。又笑う可きかな」と「手記」にあるように、復辟派へと 180 度立場を変えた。甘肅の回族の軍事指導者と連絡をつけようとした升允が彼を使者とした。工藤はすぐに甘肅に向けて旅立った。彼は外務省からもらった 200 円のうち 100 円を寶家法に与え、上海で別れた。その後、白狼軍の傷跡が生々しい陝西省から甘肅省への旅をした。「報告書」には陝西・甘肅の白狼軍の記述もあるが、それらは決して資料や伝聞だけではなく、現地で得られた情報もあったとみられるのである。

以上、「手記」の白狼軍関係記述を追いつつ、種々白狼軍に関わる重要問題について指摘・検討し、史料化できたと考える。白狼軍の内情、その根拠地霸王山、革命派と白狼軍のつながり、及び工藤・寶家法と孫文・黃興の会談など、これらだけでも白狼軍をめぐる諸問題解明にとって画期的新史料だということが十分理解できるのであろう。

#### 4.2. 「漢口日本駐屯軍に提出せる報告書」の検討

参考文献の後に掲げた「報告書」（節略）に見られるように、「匪徒」の状態説明は極めて具体的である。これは工藤が江湖会会員で、かつ白狼軍内での見聞があったからであり、会党内部にも入って調査した平山周の研究〔平山周 1911〕を補足するものがある。そこに見られる連絡方法などは白狼軍内で日常的に行われていたものであろう。白狼軍の有力首領の1人孫玉章は会党の首領でもあったことと、江湖会首領の紹介状の効果とを合わせ考えるに、やはり白狼軍と会党との関係は深いとみてよい。なお「今年三十九歳」の「今年」は白朗に会った1913年だとみられるが、1873年生まれだと満39歳ないし40歳となる。

河南省では、先行研究が明らかにしているように、各種労働者の間で「杆」という単位が一般的で、そのリーダーは「杆頭」、一つの班を「一杆子」といていたが〔開封師院歴史系等：白朗起義調査組 1960：19〕、そのような組織形態が白狼軍内でもあった〔ビリングズリー（著）山田（訳）1994：136〕。またたとえば『葉県志』によれば、65塞の壁高と濠の深さが記載されているほど多数の「塞」があった〔侯琴（編）1988：181-185〕。このように多数の塞を有した比較的平地が多い葉県に対して、山地の多い内郷県・魯山県など河南省西部の諸県では平地の塞だけでなく多数の山寨があったとみられ、それらは民衆が身を守る場だったし、同時に土匪の拠点にもなりえたことは言うまでもない。

「手記」と「報告書」が明らかにしているように、民衆は囲壁のない集落では周囲に矢来を組み土匪の襲撃や戦乱から必死に身を守っていた。土匪の拠点近辺の民衆がある程度の恩恵を蒙ったとしても、大多数の民衆は過酷な掠奪、殺戮、破壊、強姦の危険性に直面していた。また県城などでも県知事や住民が財貨を贈って掠奪・破壊を免れようともしていた。これも生きるための知恵である。孫玉章への「貢」も民衆の保険である。

工藤は特に孫玉章の義賊性を高く評価している。白朗が河南南部を拠点とした孫と連携したのは、「霸王山に入り、長駆して荆紫関の背後を突く」という時点からであろう。荆紫関攻撃は1913年7月初旬であるから、その前に孫と連携したとみられる。こうした孫との連携が、孫の名声を大首領白朗に吸収する効果をもたらした可能性がある。河南省一帯で白朗の義兵性が強調される時、実は孫の仕事だったものが白朗のものとされてしまった可能性がある。白朗自身は侵犯先では「強姦を許し、道教を蹂躪し、権富を侵犯し、暴慢恣睢、威勢猖獗」だった。また「河南人、白瞎子を知りて白狼を知らざるものありき」という威名を有した白金堂の伝承が、白朗に吸収されてしまったことも考えられよう。

さらに老河口占領に見られるように、恐るべき移動スピード、巧みな城内への浸透と騒擾、内外からの攻撃による占領など、その攻撃の具体的様相がわかるのも貴重である。

工藤は白朗の拠点について、魯山の槐樹嶺とこの霸王山だけしかあげていない。直接白狼軍内で聞いたであろうから、白朗自身の拠点としてはやはりこの2箇所だったとみてよい。槐樹嶺は宝豊県との県境の山地だとみられるが、場所を特定できない。『西峡県志』では、清末民初に蒲塘の羅姓が「霸王寨」に避難し店・学堂等を設けたと伝えているが孫玉章との関わりには何も触

れていない〔西峽県志編纂委員会 1990: 85〕。この「羅」は工藤の言う「呂某」であろう。いずれにしてもこの羅ないし呂が実質的に孫玉章の拠点霸王山を支えていたとみてよい（注 12）。また桐柏山第 2 根拠地説もあるが〔閑雲 1956: 142〕、一時的なものだったであろう。さらに舞陽県「母猪峡大本营」説〔程玉鳳（王天縦）1978-3: 27〕〔開封師院歴史系等：白朗起義調査組 1960: 21〕については、工藤は「李鴻賓は舞陽の羅漢山に居を構」えていたと記しており、舞陽はこの李の根拠地であり、白朗が入ったことがあっても「大本营」だったとは思えない。「大本营」というならむしろ最初からの根拠地槐樹嶺のほうがふさわしいであろう。因みに一々挙例しないが、河南には「母猪」という地名が地方志あるいは参謀本部陸地測量部作成の 10 万分の 1 地図に多見し、霸王山近辺にも見える。なお、白朗が宝豊県に帰還して最後に亡くなったのは、県西部の山地「虎狼爬嶺」の「三山寨」中だったという〔宝豊県史志編纂委員会編 1996: 771〕。

また孫玉章以下の白狼軍首領たちについては、かなり詳しい佚名「白狼猖獗記」の記述〔佚名 1915（杜春和 1980）〕を補足するのみならず、工藤自身が各個人について白狼軍内で見聞したことを基にした記述とみられるから信頼性が高いといえる。「猖獗記」では、白瞎子を白朗の叔父とし、別人の白金堂もいるかのように書いているが〔佚名 1915（杜春和 1980）: 363・364〕、工藤の言うように隻眼の白金堂＝白瞎子で、白瞎子は白朗の叔父ではないであろう。ただ「侯義」については、中国人の姓の在り方からみて「猖獗記」に記載する「侯義」が正しいであろう〔佚名 1915（杜春和 1980）: 364〕。

そして、「白軍は新同盟会と相通じて以て東南行して安徽に入り、長江に出で武器の供給を得て、革命軍と共に相応じて南京を陥れんと欲し〈す〉るものなり」という世上の説に対して、工藤が誤りだと断言していることが重要である。工藤と寶家法・張敬幸以外「白軍中に一の革命者なく」、早々に逃げ出した革命家を白狼軍では笑っていたほどであった。この記述もまた、白狼軍が河南省の「第二革命の主体」だったとしたり〔嶋本信子 1990: 55〕、白狼軍への革命派の影響を強調しすぎる説に対して否定的な史料になる。実際、1913 年夏から 1914 年 1 月までは王鉄石（工藤）・寶家法・張敬幸以外誰も革命派はいなかったし、逆に白狼軍と関わったとされる革命派人名中には実際に入ったこの 3 人の名は全く見えない（注 13）。档案等に見える革命派人名を疑ってみる必要がある。

さらに陝西への侵攻についても、「白軍陝西省に入り、西安を屠り、此を根拠として天下に覇たらんと欲せる」のであれば、革命派参謀のリードによる四川を目指した陝西・甘肅侵攻だったという世上の説（注 14）を否定し、第 1 の目標は堅固な城壁を持った大都市西安占領とそれを根拠地とすることだったとしている。実際工藤に依れば、白狼軍は西安すぐ近くの藍田・子午鎮まで侵攻したが、西安の内情を見誤って攻撃しなかったのである。その後甘肅に入っても、南下して四川を目指したとは思えない進軍であり、たぶん陝西に詳しい王生岐あたりの西安拠点化説が大きく影響したのではないだろうか。河南人が多い集団であるから、目的地に近い西安であれば全軍をまとめやすかったのではあるまいか。

白狼軍は臨機応変に 2 隊に分れての行軍をして交代で休憩しつつ 1 日で驚嘆すべき距離を移動

したり、問道を自由自在に抜けていく進軍で、官軍を翻弄していたことがよくわかる。そして主たる武器弾薬入手先は、掠奪による豊富な資金によって買収した官軍兵士たちからだったこともわかる。官軍側も経験を積んで対処した。その結果、白狼軍が1914年7月に宝豊県・魯山県一帯に帰還した時、官軍側が嚴重に兵士に売却を禁じていたことが効を奏したのである。新聞には白朗が派遣した人物が上海に武器弾薬を買いに来たなどの記事が見られるが[『申報』：1914年2月15日など]、それがどの程度真実性があるのかはわからない。当局の手柄とするための作り話もあった可能性もあろう。そして土匪とつながりやすい官軍の実態を目にする時、これを近代化する事の困難さも知られる。国民党軍や共産党軍という意識の高い軍隊以外、軍閥兵士にはこの体質が残っていたであろうから、中華民国の軍事を近代化しようとした蒋介石の苦労も偲ばれる。

なお第3回遠征を終えて霸王山に帰ったのを「民国一年十二月二十日」としているが、9月に攻略して占拠した棗陽から河南に帰って来たのは1913年10月であるから、やはり民国2年でなければならない。このころ荊紫関の人々は7月に侵攻された経験から、白狼軍が来た時には「貢賄」して（「手記」）、開城したとみられる。つまり荊紫関には10月以降再び入っていたのである。この点工藤は、自分が荊紫関に入ったのは7月の占拠直後であるかのように誤解していたとみられる。白朗は李官橋などを經由してまず先に荊紫関に入り、そこから蒲塘を經由して霸王山に入ったが、この10月以降荊紫関に入城していたときに工藤が同関に入ったと考えないと整合性がとれない。

白朗は本隊の侵攻だけでなく、随時首領たちを派遣している。たとえば、11月には李鴻賓・宋老年を宝豊に派遣して弾薬を集めさせ、李等は県城をも攻略した[宝豊県史志編纂委員会1996：30]。それ故当時の記録でも同時期に白狼軍の侵攻があちこちであった形に記載されがちであるが、白朗本隊は1913年10月以降荊紫関にいて、そこから蒲塘経由で12月に霸王山に入ったとみて間違いないと考える。そうだとすれば、工藤が苦心惨憺白狼軍に入ったのは11月であろうか。白狼軍はしばらく荊紫関にいて、それから12月20日に霸王山に入り、工藤たちは1914年1月2日にそこを出たことになる。「手記」にある「霸王山に居る事月余」というのは、あしかけで月を越えたことを意味するか、あるいは白狼軍に入ってから1カ月以上だったことを意味するとみられる。いずれにしても、工藤が白狼軍に入っていたのは白朗本隊が荊紫関・霸王山にいた時期だったということになる。

そして、工藤の叙述は白狼軍の残虐性も余すところなく書いており、実際の見聞に基づいたものが多かったと思われる。棗陽攻撃については白狼軍に入っていた寶家法等から聞いたものかもしれない。しかし、白狼軍と革命派を結びつけようと努力した人物であるだけに白狼軍への同情心もあった。西安占領の機会を逃したことを、「惜むべし」としているのはそれを示す。白狼軍内部に入って大首領白朗以下の首領たちに会って参謀として活動し、さらに革命派の領袖孫文・黄興と連絡をつけたという稀有な経歴の持ち主が書いた記録であること自体貴重な資料といえるが、心情的にも決して悪意を以て誇張・罵倒してはいないし、かといって褒め過ぎるわけでもないのである。もちろん、工藤が把握した範囲での情報だからそこには必ずから誤解もありうるが、

可能な範囲で修正した本研究によって部分的ではあってもこの「報告書」を史料化して公開できたと考える。

## 5. 結論

工藤が残した白狼軍関係資料を見れば、改めて土匪集団は生産から遊離した武力集団だったと規定できよう。依付・随従した周辺部分はともかくとして、少なくとも土匪の中核部分はそうである。彼らがたとえ短期間であれ地域政権を樹立できるのは極めて稀な幸運が重なった時以外ありえない。ほとんどの場合は掠奪の形で民衆に寄生する存在以上のものにはなりえない。私は、彼等を官軍兵士にも転化しうる“盗賊化した專業武力集団”という概念で理解したい。その出身がなんであれ、一度武力を生業としたものははや一般的生業に就くことが出来ない。後戻りはできないのである。その点は元兵士も同様である。しかし一方、“專業武力集団”であるが故に、彼等は地方で略奪・破壊を繰り返す土匪であっても、政府や地方政権などの武力装置化することも容易にありえた。従って、この太く短く生きようとした專業武力集団は、基本的には略奪・破壊以外出来ない反社会的存在＝破壊的寄生者であり、官軍に転化すれば政権への寄生者となる存在だった。土匪は多くの場合、秘密結社との関わりもあり、各地の情報を基にしたより実入りのいい都市を求めて流寇的になりがちである。実際、白狼軍は遠隔地の武器弾薬情報や富者の存在情報を得ており、それらは会党的情報網によるものが多かったであろう。しかも集団が大きくなれば集団維持のために大首領は常に配分財貨の獲得に迫られるためどうしても流寇は必要になる。それ故流寇性は彼等の本質なのである。

名もなき土匪が「三次革命」を掲げたように（前述）、土匪たちも一定の「大義」を標榜したり、求める事はかなり多く、白朗も「中原扶漢軍大都督」と称したともいわれる〔杜春和 1980: 223-225〕。そういう形で自らの存在意義を少しでも見出し、自己正当化を図ることも多い。そこに拠点近辺の一部だけであっても「義賊的」側面を示し、恩恵を与えることもみられる。しかし、そういう存在でも圧倒的多数を占める民衆の敵の場合が多かったのである。それ故、彼等を「農民反乱」「農民起義」といった概念で括ることは無理であり、まだ「民衆反乱」のほうが適当な概念といえる。ただし、彼等アウトロー專業武力集団を「民衆」に含めてよいのか、という疑問は依然として残っている。この点、今後の「民衆反乱」研究の進展の中でさらに議論が進むことを期待したい。

本研究は、工藤忠資料という他に類例のない資料を史料化できたことによって可能となった。この点、利用を許可された資料所蔵者のご厚意に心より感謝したい。そして、縷々述べてきたように、新史料提示のみならず、新たな理解をも示すことができ、今後の白狼軍研究にとって大きな進展をもたらすことができるものと信じている。

（本研究は、JSPS 科研費 23520858 の助成を受けたものです）

## 注

- (1) 中支那派遣隊については、櫻井良樹の研究を参照〔櫻井 2008〕〔櫻井 2009〕。
- (2) 外国系の新聞である北京の『順天時報』（日本系）や上海の『申報』（イギリス系）などでは、比較的統制は少なかった可能性がある。なお、民国時代の新聞の状況については、〔曾虚白（主編）1966〕〔馬光仁（主編）1996〕に詳しい。
- (3) この開封師範学院「白朗起義調査報告」は入手できなかった。その要点を簡潔にまとめたものが開封師範歴史系等：白朗起義調査組「白朗起義調査簡記」である〔開封師範歴史系等 1960〕。したがって主要内容はこの「簡記」に依拠する。
- (4) 『支那』は、中国の新聞情報などを数多く掲載して、白狼軍についても記載が多く、また大陸にいた東亜同文会会員が書いたとみられる 1914 年の白朗関係年月日を整理した記事も見られるなど〔同 5-13: 44〕、貴重な資料を提供している。
- (5) 1917 年の奈良武次日記には、工藤の訪問が 1 月 22 日と 11 月 18 日の 2 回見える〔黒沢文貴 2002: 77、2003: 57〕。11 月の訪問は、工藤が「参謀本部及青島軍司令部ノ保護」で升允と甘肅旅行することの報告であった。なお、1916 年の日記は未公表である。
- (6) 張振武は袁世凱によって 1912 年 8 月に逮捕され処刑されていたが、工藤は知らなかったとみられる。張振武生存・拳兵説が流布していたものとみられる。
- (7) 南京での重要事項の月日については〔郭廷以（編著）1979〕などを参照した。「手記」では「余等南京城を退いた翌々日」落城としており、工藤は 8 月 30 日に南京を脱出した。
- (8) 「手記」には「塩酸加里と赤い爆薬（黄雄）」ともあるので、火薬の主原料塩素酸カリウムと中国で言う雄黄（鶏冠石。リアルガー。As<sub>4</sub>S<sub>4</sub>。赤色）を所持したとみられる。なお近現代日本の鉱物学では雄黄＝オーピメント、雌黄＝リアルガーと逆にしている。
- (9) この寶家法の名前について、拙著で「寶家宝」としたのは〔山田勝芳 2010: 66 等〕、誤りである。ここに謹んで訂正したい。
- (10) 民国時代の地図や 10 万分の 1 地図で確定しがたい地名の調査や、現在地との対比の面で Google Earth が多面的に利用できるツールとして役立った。
- (11) 実際、民国 3（1914）年 3 月 13 日の 2 件の大總統令では、凌鉞・劉承烈・劉天猛・熊灌香などが白狼軍を煽動し、孫文が手紙を出したり、孫文・黃興・李烈鈞が使者を派遣している、と盛んに革命派との関わりを強調していた〔『政府公報』: 664 号（3 月 14 日）〕。1913 年 7 月 20 日付の黃興が白朗に出したという手紙は、1 人の逮捕者から得て天津『大公報』に載ったものだが〔杜春和 1980: 226〕、その信憑性はどうか。しかもこの手紙以降 1915 年まで袁世凱政権側が盛んに革命派と白狼軍の関係を強調しているのも〔杜春和 1980: 226-234〕、逆に疑わしさを増す。手紙等の真偽を疑ってみる必要があろう。
- (12) 『西峽県志』の記述に孫玉章が無いのは、霸王山地元の西峽県でも「白朗神話」が優勢なためとみられる。同県志に霸王山と孫の説明を付け加えるべきであろう。
- (13) 今井駿は先行研究を参照しつつ、革命派参謀として陸文禔、李白茅（毛）、楊芳州、呉士仁、呉虚子、劉生、王三、呉明、熊嗣齋、賈誼、閻小固、凌鉞、劉承烈、陳芷平、鄒永成、劉懷錫、劉天猛、張樂亭、劉天樂、于華慶、孟参謀、洋猴など多数を挙げている〔今井 1991: 87〕。また宗方小太郎の大正 2 年 6 月「民変」統計には全国各地の土匪記録があり〔アジア歴史: B08090259500〕、革命動向を受けて地方の混乱が拡大しつつあったこの当時、各地の土匪活動の活発化がわかり、各地への白狼軍侵攻を「第二革命」のための活動だとは簡単には言えない。さらに寶家法・張敬幸の 2 人が白狼軍に入るまでは革命派はいなかったし、9 月の襄陽攻撃などを 2 人の影響によるものとする事もできない。
- (14) 「白朗起義調査簡記」は、老河口を占拠したとき白朗が四川省を根拠地とする考えをもったが、孫文派遣の参謀沈某が建議して四川に入るのは道が険しく軍の防禦が厳しいので、陝西から甘肅へ行き、南下して四川に入るのがよいとし、それに従ったとしているが〔開封師範学院歴史系等：白朗起義調査組 1960: 22〕、「孫文派遣」は疑問である。

## 参考文献

関係論著・史料等は多数あるが、引用したものを主とした。

佚名

1915「白狼猖獗記」杜春和『白朗起義』\*原文は『時事匯報』8号(1915年)。

今井駿

1991「白朗の乱についての一考察～白朗集団の組織的実態について～」(静岡大学)『人文論集』42。

王宗虞

1964「試論白朗起義の性質」『史学月刊』1964年12期。

王留現等

1979「白朗起義始末」『河南文史資料選輯』第1輯。

開封師範歴史系・河南歴史研究所：白朗起義調査組

1960「白朗起義調査簡記」『史学月刊』1960年2期。

開封師範学院

1960「白朗起義調査報告」『開封師範学院学报』1960年5期。

郭廷以編著

1979『中華民國史事日誌』第1冊、中央研究院近代史研究所。

金子克己

1996『支那革命と其の前後』藤川知佳子出版。

閑雲

1956「白狼始末記」『近代史資料』1956年3期。

喬叙五

1956「記白狼事」『近代史資料』1956年3期。

工藤忠

1952『皇帝溥儀—私は日本を裏切ったか』世界社。

黒沢文貴

2002「奈良武次軍務局長日記」『東京女子大学紀要論集』53巻1号。

2003「奈良武次軍務局長日記(2)」『東京女子大学紀要論集』53巻2号。

侯宜傑

1982『袁世凱一生』河南人民出版社。

侯琴責任編集

1988『葉県志：清同治辛未』中州古籍出版社。

坂野良吉

1970「白朗起義の歴史的意義をめぐって—民国初年の反軍閥闘争—」『歴史評論』243号。

櫻井良樹

2008「近代日中関係の担い手に関する研究(中清派遣隊)—漢口駐屯の日本陸軍派遣隊と国際政治—」『(麗澤大学)経済社会総合研究センター Working Paper』No29。

2009『辛亥革命と日本政治の変動』岩波書店。

嶋本信子

1974「白朗の乱にみる辛亥革命と華北民衆(上)」青年中国研究者会議編『中国民衆反乱の世界』汲古書院。

1986「白朗の乱(一)」中国民衆史研究会『老百姓の世界—中国民衆史ノート—』4号。

1990「白朗の乱(三)—河南の第二革命と白朗—」『史論』43集。\*嶋本はこの論文を前2論文の続きであることを明示して(三)とした。

周源

1984「白朗起義と反帝問題—也談白朗起義の性質—」『近代史研究』1984年第4期。

鄒永成口述、楊思義筆記

1956「鄒永成回憶録」『近代史資料』1956年第3期。

西峽県志編纂委員会

1990『西峽県志』河南人民出版社。

曾虚白主編

1966『中国新聞史』国立政治大学新聞研究所。

程玉鳳（王天縱）

1978「白朗史話 1～3」『中原文献』10 卷 2・3・4 期。

杜春和編

1980『白朗起義』中国社会科学出版社。

董克昌

1958「白朗起義性質与作用的研究」（厦門大学）『學術論壇』1958 年第 3 期。

波多野澄雄・黒沢文貴責任編集

2000『侍従武官長 奈良武次 日記・回顧録』全 4 巻、柏書房。

馬光仁主編

1996『上海新聞史（一八五〇～一九四九）』復旦大学出版社。

平山周

1911「支那革命党及秘密結社」『日本及日本人』569 号附録。

Bilingsley, Phil

1988 BANDITS in Republican China, Stanford University Press.

ビリングズリー、フィル著、山田潤訳

1994『匪賊：近代中国の辺境と中央』筑摩書房。

Bilingsley, Philip & Xu Youwei（徐有威）

2004 From “Peasant Bandit” to “Prominent Personality”: Bai Lang in the Scales of History, 『国際文化論集』（桃山学院大学）30。

宝豊県史志編纂委員会編

1996『宝豊県志』方志出版社。

ホブズボーム、エリック著、船山栄一訳

2011『匪賊の社会史』筑摩書房、ちくま学芸文庫。原書は 1969 年刊行。

山田勝芳

2010『溥儀の忠臣・工藤忠 忘れられた日本人の満洲国』朝日新聞出版。

山田賢

1998『中国の秘密結社』講談社。

吉尾寛編

2012『民衆反乱と中華世界—新しい中国史像の構築に向けて—』汲古書院。

#### [その他]

アジア歴史資料センターの史料 \* [アジア歴史：レファランスコード] として引用する。

『支那』（東亜同文会発行）。

『申報』 \* 記事の年月日を示して引用する。

『政府公報』 \* 1971 年の復刻版（文海出版社）を利用。

陸軍参謀本部陸地測量部作成 10 万分の 1 地図 \* 標題と作成年を記載する。

#### [資料「漢口日本駐屯軍に提出せる報告書」（節略）]

\* 原文の引用は必要な範囲だけとする。引用は原文を尊重し、濁点の有無などはそのままとする。常用漢字、旧かな遣いとし、適宜段落・句読点を加え、文字訂正は〈〉で、文字補足は〔〕で示す。見出しは「報告書」原文にあるものである。中略する際、文意が通りやすいように（）内に移動経路などを簡単に記す。なお、陝西・甘肅侵攻部分は大幅に省略した。



## 漢口日本駐屯軍に提出せる報告書

## 河南省の匪徒

## 緒論

顧みれば欧州の動乱發して早、既に四歳（後略）

## 匪徒の種類

哥老会（中略）而して今に至つて、同会の最も瀾漫せる地方を南陽一帯及び魯山、宝豊、汝州、伊陽並に東河南の各所と為す。

江湖会 江湖会は第一革命後新たに創立せられたる秘密結社にして、哥老会の変名なり。徒類最も多く、活動も猛烈なるものにして、鄧州、荊紫関一帯に蟠屈（居）し、其の勢猖獗なり。

在理会 在理会は南陽、新野、唐の諸県に虎視す。教徒多くは土匪にして、然らざる者は解散兵たり。（後略）

硬肚兒「コートル」。曾て北清事変の際に残戾暴虐、之れ逞うせる義和団の徒と其の種を同じうす。鎮平、内郷、浙（漸）川の方面に蟠拠す。一種迷信の念を抱懷せり。

白蓮会 白蓮会は帰徳一帯及び夏邑、永城附近に雄視す。（後略）

## 信仰と主張（全文省略）

## 良莠と其情誼（全文省略）

## 匪徒の平生と其の制裁

若し夫れ匪徒が日常生活の状態に至りては、殆んど普通世上一般のそれと異なるあるを看ず。一定の業なく、家無くして、敗寺の簷又人家軒に起臥寝食する者なきに非らずと雖も、其の多くは農工等の業に従事し、然らざるの徒に至りては或は苦力となり、臨時傭人となり、孜孜々々として其の業に勤め、一旦事を挙げんとするや、即ち城門又は城壁等の所定の場所に、匪徒間共通の謎語符号にて東西を諜し合せ、忽然として起つ。而して匪徒間一定暗号の有るあり。多くは辮髪（辮）の把り様、煙管の持ち方、或は笠帽子の紐、手の振り方等によりて所属会員たるを弁別し、日常の音信は専ら符号と判字とを用う、固より他人の窺知する能はざる所なり。（後略）

## 白朗及び白狼軍の行動

白狼実は白朗。河南省宝豊県大營の産。今年三十九歳。幼にして父を亡ひ母に事へて至孝、家富めるにあらざるも、又貧ならず。村塾に学んで略今昔に通ず。長ずるに及び大志あり、村人の読師として尊敬せられ、又常に時勢の振はざるを慨じ、自ら以て燕趙悲歌の士と做す。時に偶々彼が居村、土匪の襲来するところとなり、彼が家屋も亦劫掠せらる。若し之を動機と言ひ得べくんば、彼は之を動機として十年後の白狼団を造れるなり。（中略）白朗の初めて匪徒に入れるは彼が二十六才の時、固より沈勇にして奇才あれば、日を経るに従つて群中に穎脱し、嶄然頭角を見はす。而して又性有の義氣を発現し、匪類の心欲を収攬したれば、衆の彼を頼むこと深く、呼ぶに哥哥を以て敬ふ。辛亥革命の勃發時彼は魁首寶某と共に魯山の塞に在り、（寶が政府軍の招きに応じて殺されて後）乃ち山寨の残徒三十二名を結束し血を歃つて盟を結び、自ら首領となつて大に悲憤の氣を吐かんとす。斯くて近界を撫按し、遠境を掠奪し、嚙味蛮勇の徒を聚集して、兇器を与へ、強姦を許し、道教を蹂躪し、権富を侵犯し、暴慢恣睢、威勢猖獗、竟に這の一団の長たる彼をして、姓は白なるも名は狼たらしめたり。

白朗、居を魯山の槐樹嶺に構へ、時々遠征するも、其の傍近を荒さず。漸く数を増し、及び魯山の槐樹嶺を出づ。（西華・商水などへ）斯くて西平・鄧城の間を過り、揚々如として山寨に帰る。之れ実に白狼第一回の長途征行なりき。（中略）

之れより白狼の名世上に喧々として伝へらる。（中略）切に新鋭の武器を獲んとし、偵探を放つて其の所在を狙ふ。時恰も唐県（唐）の知事劉氏三營の兵を且（擁）して南陽に向はんとし、精巧なる銃機弾薬を有す。白狼軍之を探知し、乃ち奇襲して奪略せんと欲す。先づ部下数十名に策を授けて唐県城内に入らしめ、自ら兵を率ゐて竊に塞を出て南召県の東より間道を進み、急遽唐県に殺到し、内外呼応して喊声を揚ぐ。城兵狼狽措くところを知らず、銃機を遺棄して逃走す。茲に於て白狼一兵を傷けず小銃六百挺銀貨数万を獲たり。既にして白狼の名は揚り、威は震ふ。併も唐県の収獲を以て兵に驕し、銃を供したれば、軍中の活氣横溢し陣容整頓す。されば魯山の本拠に帰らず、更に轡を転じて西の方鄧州に向ひ、内郷県の南を経て孟（蒲）塘の山中霸王山に入り、長驅して荊紫関の背後を突く。（王天縱の弟王天祐を破り、荊紫関に入る）余の白狼軍に投し、白朗に会す（し）たるは、白狼軍が荊紫関を占領せる直後なりき。之れより、余、白狼軍の参謀として行動を共にせり。白狼軍は難なく荊紫関を脱出して、東嚮して蒲塘に出で而して霸王山に帰る。之れ白狼第二回の長征なりき。

白狼、本拠に在りて武器弾薬の補填する事約月余、又自ら部下を統率して長征の途に上る。（南陽から湖北へ。唐県鎮、棗陽城へ）、棗陽は城堅く兵強く、剰へ白狼の襲来を予知し防備頗る厳なるものあり。之を容易に抜く能はずと雖も、白狼軍の突撃真に峻酷、且つ民家を壊す、教堂を焼き、外人を虐げ、婦女を姦し、獐猛又猖狂たれば、城兵終に對抗する能はずして降る。而して白狼軍の入城するや、暴威を擅にして惨虐に到らざるなし。（官軍に包囲されると）竊に銀一万元を贈りて北門の敵將に通じ、一方南門に旗鼓して牽附して出動に擬し、攻囲軍の主力を此に集中せしめ、却つて北門の虚薄を衝き、易々圍を破つて出づ。（河南の新店集・林家盆に）此に於て西河南一帯の諸県は土匪随所に蜂起し、四方盜行はれ、行路人絶え、若きは耕を抛ち、矛を取つて巷に騒ぎ、老は家を棄て婦を伴ひて山に匿れ、宛然無政府の状態を呈し、真に弱肉強食の修羅場と化す。（李官橋付近から）忽然驚を転じて北し、徹夜疾走すること百二十清里、不意に乗じて一氣鄧州の南関を屠り、余勇を駆って鎮平県を掠め、悠々孟（蒲）塘の山中霸王山の本拠に帰る。時は民国一（二）年十二月二十日にして茲に白狼軍第三回の長征を終れる也。

（魯山に帰り、弾薬の補充をして、禹州を襲い、泌陽で宋老年と会して、河南東南部の確山県、正陽県、羅山。光州で）白軍、城に入るや家を焼き、人を殺す。斯くて悉く灰燼にきして、荒涼目も当てられぬ有様、夜に入り、余焰尚ほ烈烈として冲天に反映して、其の間を逃げ迷ひ泣き叫ぶ声凄愴として惨慄（慄）を極む。（一隊は光山、一隊は商城へ）商城の知事此の事を耳にするや、先づ使を遣（遣）して和を請ひ、銀数万両を送る。彼等又敢て犯さず、（中略）固始県も又商城に倣ひ、銀を送りて和を請ふ。故〔に〕又敢て犯さず。（安徽省の霍邱・六安に。これに対して袁世凱政権は四省の大軍を動員）、然りと雖も官軍皆遠く闊んで敢て進まず。（中略）当時、李鴻賓は舞陽の羅漢山に居を構ひ（へ）て官軍を悩ます。薊老八は長葛県にありて鉄道に出て鉄路を破壊するなど、官軍殆んど其の奔走に苦しめり。時、白軍、使を李鴻賓に遣わし背後より不意に官軍を打たしむ。（中略）

此の当時世上の議論紛紛として曰く、白軍は新同盟会と相通じて以て東南行して安徽に入り、長江に出で武器の供給を得て革命軍と共に相応じて南京を陥れんと欲し（す）るものなりと。之れ誤れるの甚だしきかな。白軍中に一の革命者なく、又苦心惨憺、艱難死を犯して、革命の成功を図らんとするが如き革命者なきを、彼等白軍の如きは革命軍の余りに意気地なきを笑ふが如き有様なり。何ぞ革命との聯絡を図らんや。

（白狼軍は安徽省霍山県と湖北省英山県の間の大別山地に約 20 日。その後）鳥も通わぬ山路、即ち將軍嶺を越い（へ）て、大勝関に出で、武（勝）関の北、鉄道を横ざりて相（桐）柏県の南に出で、而して白金堂の兵と会し、山に沿つて河南湖北の境を西行して新野の南に出で、突然老河口を突く。此の日、老河口に祭ありて人の出入甚だ多く、彼等白軍田舎人と化し、以て市城内に入り込み、時機を見て短銃を以て官兵を狙撃す。其の銃を奪ひて奮闘し、到る所其の手段を用ひ、官軍又何人の土匪なるやを弁する能わ（は）ず。唯狼狽するのみ。之れが為良民の殺されたるもの多く、白軍の大部隊は此の機に乗じ、北門と西門より突撃す。官軍又奮闘せしと雖も、猛烈なる突撃に抵抗する能はず、遂ひに襄陽に通る。（中略）

茲に於て西の方陝西省に入り、以て古都西安を屠り、天下に覇たらんと。（藍田に。子午鎮は）西安を去る南方四十清里の所に在り。西安城内兵少なくて、其の危き事累卵の如し。然れども惜むべし、其の事情に通ぜず。惟城内兵多きとなし、又加ふるに弾丸の缺乏あり。之に於て王生岐策を獻じて曰く、西安ノ城堅くして一挙に抜く可からざるものあるのみならず、城兵多く精鋭の武器を有す。故に先づ北行して乾州を突き、武器の準備をす。以て東行して三原を屠り、山西省蒲城の土匪と通じ、背面より西安を突く〔に〕しかずと。

（甘肅に入り秦州守將馬国仁との激戦など）白軍甘肅省に入るや世上又曰く、白軍は回回族と結び、以て天下に覇たらんと。之又白軍を知らざる者の言のみ。白軍陝西省に入り、西安を屠り、此を根拠として天下に覇たらんと欲せるも、遺憾、乾州の兵器已に無く、又西安を奪ふ可からず。空しく返るの愚を演せず、即ち甘肅省に入る。至る所奪掠を事とす。（中略）此の遠征に於て得たる所の物資甚だ多く、阿片・馬・銀等幾百万なるを知らず。白狼、馬七十余頭に積みて大營の古巢に輸送す。兵器の供給に応ぜしむ。然るに此事早くも官軍の探知する所となり、路に要して之を奪ひら（と？）る。尚ほ魯山・宝豊・大營の諸所に嚴重に守備す。白軍到らば狙撃せんと待ち構へたり。又一方兵卒の弾丸を調べ、一丸たりとも失ひしものは嚴罰に所（処）す。兵又軍律に触るるを恐れ、敢て売るものなく、白軍此の事あるを知らず。正々堂々古巢に帰る。豈計らんや弾丸の補充なきのみならず、官軍益々加はり、攻むる事甚だ急なり。白軍激戦数回、其の功なく遂に破る。此の戦に於て白狼敵弾に当りて死せりと。（後略）

#### 白狼軍中の梟雄

##### 孫玉章

白狼軍中雄將雲の如く、而も其の筆頭を推せば、孫玉章を挙げざるべからず。彼は河南鄧州の一僻村に生れ、今年正に不惑。幼にして膂力人に超え、豪胆他を圧す。（中略）孫玉章、性義氣に富み、慈心に深く、

長ずるに及び家産を抛ちて窮民を救ひ、終に余財を剩さず。而して彼の名声漸く郷土に高し。既にして彼は江湖会に入る。(中略) 遂に彼をして江湖会の魁首たらしむ。(中略) 彼れの一たび頭領となるや、本拠を内郷県の西方霸王塞に定め、漫に無名の師を出さず。(中略) 土民は却つて簞食壺漿して之を犒ふの風ありき。而して霸王塞に帰れば、四隣貢くところの穀物山を成して在り。彼即ち部下と共に之を食ひ、奪ふところの財宝を貧民に施して、未だ曾て一物をも懐にしたることあらず。故に部下の心服益厚く、土民の尊敬彌深し。霸王塞は蒲塘の北十二清里、重疊連亘する群山の中、巍然として秀づる一峰の頂上に在り、登るには羊腸崎嶇たる小径ただ一條。所謂一夫防げば万夫も破り難き天成の險要たり。而して蒲塘は四面連山を以て囲まれたるも、その播針(鉢)に似たる内底は平野にして復豊饒。富数十万金を累ねたる呂某在り。併も呂は孫玉章と交り最も深く、而して蒲塘は有口一万有余人を養ふ〔べ〕き所、自ら霸王山塞の兵站部を以て任ず。

#### 王生岐

王生岐は河南省南陽の人。(中略) 年二十八、第一革命当時南陽に於て義を起して、王天縱と共に陝西を打ち、其の功により即ち陝西第一師団長張雲山の武將となり、鳳翔府に旅団長として三営の兵を有して駐す。(反兵となり) 漢水を下りて鄖陽より荊紫関に至り、内郷県に入つて孫玉章と会せる也。(後略)

#### 白金堂(一名白瞎子)

白金堂は南陽の橋頭の人、年三十七才。一目眇なるを以て人皆白瞎子と呼ぶ。彼れ部下三千人を有す。(中略) 河南人、白瞎子を知りて白狼を知らざるものありき。(後略)

#### 宋老年

宋老年は河南泌陽の産にして、年六十三才。白髪白髯の老武者なり。故に人呼んで宋老年と号す。彼れ易を善くす。頗る奇謀に富み、其の為す所総て人の意表に出ず。故に人皆其の智に服す。居を泌陽の抜山に構へ、四方を畧す。(後略)

#### 李鴻賓

李鴻賓は河南省裕(葉)県保榮(安?)鎮の産にして、年三十五才。兵一千五百有余を有し、其の容貌は一見婦女子の如きも、沈勇にして敵と戦ふに当るや、率先して進み、進んでは退くを知らざる猪武者なり。之れ又舞陽の羅漢山に籠り、官軍を悩ます事、年あり。(中略) 甘肅秦州の激戦に於て、遂ひに乱軍の中に討死せり。

#### 王成敬

王成敬は河南鄧州の禹山に生れ、年二十四才。部下三百余名を有す。(後略)

#### 侯(侯)義

侯(侯)義は湖北省光化県の産、年四十一。部下一千余名あり。(後略)

#### 魏老八

魏老八は河内(南)長葛の者にして、兵四五百を有す。(中略) 其の外、南召鐘店に袁翰あり、盧氏県に焦小保あり、嵩山(県?)に海健功あり、皆一千余の部下を有し、勇名又四隣を振動す。

